

民族楽器の 奏でる 郷愁の音楽

日本の三味線とか琴とかと同様に、オーストリアやハンガリーの民謡にも、なくてはならない独特の楽器がある。

そのひとつがアコーディオン。日本でももちろん見かけるが、オーストリアの本格派アコーディオンのひとつ「シュタイリッシュエ・ハーモニカ」は近くで見ると、我々が知っている普通のとはちよつと様子が違う。

1860年頃ウィーンで開発されたシュタイリッシュエ・ハーモニカの基本的機構は、アコーディオンと同じである。しかしなんと左手であやつるバスセクションばかりでなく、右手でメロディーを弾くところまでがボタン式なのだ。それも3列、あるいは4列に配置されている。

このボタン式鍵盤(演奏盤)の配列だが、横は全音階で、列ごとに4度ずつの音程差がある。「そんなので演奏できるの?」と思いたくなるが、慣れれば楽なもの



シュタイリッシュエ・ハーモニカを
弾くエルンスト・シュビルクさん

らしい。ただ、これで普通の音階を弾くのは大変だ。メロディーは声を出して歌い、その伴奏をするのに適している楽器である。

もちろん「これでは不便だ」と思う人もたくさんおり、そんな人のためには半音階の配列になっているものも作られている。

この楽器をひとつひとつハンドメイドで作っているのが、ウィーン市のすぐ南にあるラクセンブルクという町に住んでいるエルンスト・シュピルクさんだ。ラクセンブルクにはコンサートが行われる美しい宮殿もあるし、春先には近くで苺つみができる。

シュピルクさんは一見すごいおじさんに見えるが、1954年生れ、まだ30代である。パイオルガンの製作が本業だったが、そのうち民族楽器を作り始め、現在は自宅に専用の工房も整備した。

こういった楽器は注文製作の形をとる事が多いが、ちなみにこのシュタイリツシエ・ハーモニカを作るのには約4週間かかるのだそうだ。

「アコーデオンの」なのに「ハーモニカ」と呼ぶのは、これいかに？

実は不思議でも何でもない。ハーモニカには「リード」という金属の薄片がついていて、これが息を吹き込む時と、吸い込む時に

振動して音が出る。アコーデオンはいわばこのハーモニカをずっと大きくしたようなものに、蛇腹式のふいごをつけ、口のかわりにこれで空気を出し入れして音を出すわけだから、基本は全く同じという事になる。

アコーデオン以外にシュピルクさんが製作している楽器には、たとえば「バックブレット」がある。日本語に直訳すれば「まな板」だが、ツインバル（あるいはツインバロン）、またダルシマーとも呼ばれる楽器だ。平たい共鳴箱に張り渡された弦を両手に持った小さな木製のばちで木琴のように叩いて演奏する。

「ハーケンハルフエ」という、足にはさんでつまびく小型ハープもある。あげくの果てには余った木材で壁時計やドアチャイムまで作ってしまう。

そしてシュピルクさんのもうひとつの特技は？ そう、いわずと知れた、これらの楽器の演奏である。自分が主宰するバンドもある。音楽にひたっているのが何よりも幸せであるように見受けられた。

日本でいうところの「歌謡曲」、つまり一般の多くの人がファンと鼻歌でも歌える、あるいは知っている音楽にあたるのが、当地ではこれら民族音楽と言えよう。

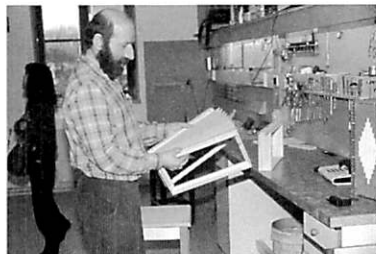
ウィーンのような大都会はともかく、ちよつと田舎にいわば、どんなところでもこういった音楽は日常生活の中で楽しまれている。みんなて歌い、演奏するばかりか、それに合わせて村中で踊るのだ。

日本の小学校の運動会などで披露されるフォークダンスのルーツはまさにここ。こちらのお祭りでは絶対に欠かすことができない。そういう時に揃いの民族衣装を着飾って演奏をしてくれるバンドも、各地に星の数ほどある。

それだけ人々に愛され、日常生活に密着している音楽だから、テレビ番組として構成してもかなりの高視聴率が得られる。スタジオオに招待されて演奏を披露するアマチュア達の何と嬉しそうなこと！

日本のヒット曲は命が短い。いくら一時もてはやされても、結局は使い捨ての音楽だ。小学校の音楽の時間で習う「月の砂漠」や「黒田川」のように昔から定着した唱歌もあるにはあるが、これらも生まれてからまだ100年はたっていない。

お爺さんからお父さん、そして子へ孫へと歌い継がれ、家庭の中で生き続けてきた民謡には、オーストリア人の持つ特別な郷愁が込められている。

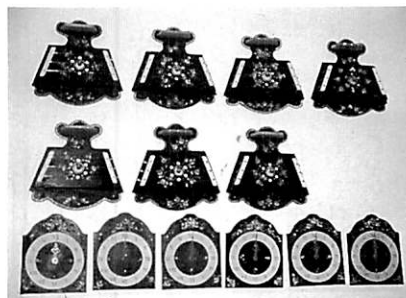


蛇腹の組立て

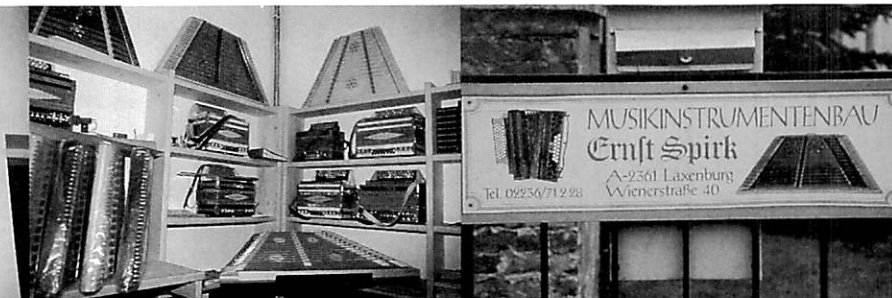
ハーケンハルフェを弾いてみる



専用のハンマーによるハックプレットの演奏



ドアチャイム、掛け時計



完成した楽器の数々

表通りの店の看板